

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00050

研究課題名（和文）明清期浙江寧紹地域における学知の転換 - 劉宗周・邵廷采・全祖望・章学誠 -

研究課題名（英文）Transformation of academic knowledge in the Ningshao region of Zhejiang during the Ming and Qing dynasties - Liu Zongzhou, Shao Tingchai, Quan Zuwang, and Zhang Xuecheng -

研究代表者

早坂 俊廣（HAYASAKA, TOSHIHIRO）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：10259963

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：「中国の明清交替期に於いて、どのような学知の転換が起こったのか」という問題に関し、浙江寧紹地域出身の思想家たち（劉宗周・邵廷采・全祖望・章学誠）に即して考察した。これにより、中国思想史において漠然と「朱子学・陽明学の時代から考証学の時代へ」と描かれることが多かった時代の転換の意味を確認することが出来た。特に、これまで論究されることが少なかった邵廷采と全祖望の関係性について、明確且つ詳細に究明することが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、時代の転換を体現するような個性をもつ思想家群を、時代の最先端を走っていた地域の磁場に即して考察したものである。特定の時空間に即しつつ思想家の思想構造を動的に解明しようとする研究手法は、申請者が20年以上にわたって続けてきたものである。本研究は、このような継続性を活かしたうえで、明清期浙江寧紹地域における学知の転換へと研究の歩みを進めた。また、本研究を推進するにあたり、積極的に中国の研究者との交流を行った。本研究の学術的意義や社会的意義は、以上の点に存する。

研究成果の概要（英文）：Regarding the question, "What kind of changes in academic knowledge took place during the Ming and Qing transition period in China?", I analyzed the discourses of thinkers from the Ningshao region of Zhejiang (Liu Zongzhou, Shao Tingchai, Quan Zuwang, and Zhang Xuecheng). As a result, I was able to confirm the meaning of the shift in time, which in the history of Chinese thought was often vaguely described as "from the era of Neo-Confucianism to the era of Qing Dynasty Textual Research." In particular, I was able to clearly and in detail investigate the relationship between Shao Tingzhao and Quan Zuwang, which had not been studied much in the past.

研究分野：chinese philosophy

キーワード：Zhejiang Liu Zongzhou Shao Tingchai Quan Zuwang

1. 研究開始当初の背景

直接的には、申請者が研究代表であった基盤研究(C)「證人社と證人書院の間 明清期寧紹地区に見る思想史の転変」(15K02031)の流れを受けている。同研究は、明末に紹興で活躍した劉宗周の思想がどのように継承されていったのかを検討するものであった。題目が示す通り、紹興の「證人社」における劉宗周の思想活動が、寧波の「證人書院」として黄宗羲にどのような形で継承され、全祖望によってそれがどのように称揚されたのか、が研究テーマであった。この研究の過程でまさしく「證人社と證人書院の間」を、黄宗羲・全祖望とは異なる形でつないだ重要な存在として、餘姚の「姚江書院」が浮かび上がってきた。同研究のなかでは、その書院の濫觴となる義学に関わった人士たちに対する黄宗羲の(否定的な)評価や、その人士の一人である史孝復と劉宗周の論争を分析することができた。その過程で、姚江書院の歴史にとって枢要な役割を果たした邵廷采に興味をもった。彼は、黄宗羲と交流をもった思想家であり、また、全祖望から激しく非難された人物である。同研究の流れを受け、明清期寧紹地域における思想動向をさらに掘り下げたいという思いが、本研究計画へとつながった。

2. 研究の目的

中国近世に於ける「哲学から歴史学へという学知の転換」の意義、及び「哲学の自己展開の中から歴史学が生み出されて来たその内在的理路」を抽出する。明代中期から清代初期にかけて時代を代表する思想家を輩出し続けた寧波・紹興地域に視線を定位し、比較的長いスパンでその動向を俯瞰しつつ、真正な「学知」とは何かという認識の変遷を検討することを通して、中国思想史において漠然と「朱子学・陽明学の時代から考証学の時代へ」と描かれることが多かった時代の転換の意味を、「学知の転換」という視点から再考する。以上の問題意識に基づき、「明清期浙江寧紹地域における学知の転換 - 劉宗周・邵廷采・全祖望・章学誠 - 」という研究課題を設定し、時代の転換を体現するような個性をもつ思想家群の精神世界を、時代の最先端を走っていた地域の磁場に即して考察していく。

3. 研究の方法

本研究は、時代の転換を体現するような個性をもつ思想家群を、時代の最先端を走っていた地域の磁場に即して考察するものである。特定の時空間に即しつつ思想家の思想構造を動的に解明しようとする研究手法は、申請者が20年近くにわたって続けてきたものである。

研究開始当初に予定していた現地調査は、コロナ渦の影響を大きく受けて、ほとんど実施することができなかった。ただ、様々な方策を用いて現地の研究者と交流を維持し続けたことにより、文献読解を補完することが実現でき、それによって、「地域の磁場に即して考察」することを掲げた目的は達成することができた。

4. 研究成果

1) 邵廷采と全祖望(上), 早坂俊廣, 信州大学人文科学論集, 第9号第2冊, pp.21-41, 2022年

2) 邵廷采と全祖望(下), 早坂俊廣, 信州大学人文科学論集, 第10号第1冊, pp.1-27, 2022年

この2篇の論考により、これまで論究されることが少なかった邵廷采と全祖望の関係性について、明確且つ詳細に究明することができた。特に、十年以上も論文化に苦渋していた「全祖望と「冬青樹」の記憶/記録」というテーマを、邵廷采との対比のなかで論じることができたのは、何よりの喜びであった。また、邵廷采と姚江書院の関係性について分析する際に劉宗周を取り上げ、邵廷采史学思想を分析する際に、章学誠の邵廷采評価を検討したことにより、当初掲げた「明代中期から清代初期にかけて時代を代表する思想家を輩出し続けた寧波・紹興地域に視線を定位し、比較的長いスパンでその動向を俯瞰」するという目的を達成することができた。

3) 呉震「陽明後学の研究 回顧と展望」, 早坂俊廣訳, 信州大学人文科学論集, 第11号第1冊, pp.1-11, 2023年

この論考を翻訳することにより、劉宗周が生きた「明末」という時代をさらに広い文脈のなかで捉えることができた。

4) 論王畿の“天根月窟説”, 早坂俊廣(論文寄稿・ビデオ発表), 2021 陽明心學大会(中国浙江省紹興市), 2021年10月29日

5) 周汝登の新安行, 早坂俊廣, 2023 陽明心學大会(中国浙江省紹興市), 2023年10月31日

以上の2件は、国際学会に於ける研究発表である。どちらも、明代紹興を代表する陽明学者に関する内容であり、明代紹興の思想動向がより鮮明になっただけでなく、コロナ渦にあって困難を極めた国際学術交流を維持したという点もまた「研究成果」であるといえよう。

研究申請の段階で「邵廷采に注ぎ込む流れとしては王守仁の陽明学と劉宗周の「證人」の学とがあり、邵廷采から発した流れは、全祖望という批判者と章学誠という賛同者を得たわけである。

前者では、宋代から明代にかけて展開した「心性の学」が本分であり、後者については、いわゆる「清代浙東史学」に属する領域である。このように、邵廷采は、「明清期浙江寧紹地域における学知の転換」を体現する、思想史のリトマス試験紙のような存在なのであった。」という見立てを掲げたわけであるが、総じて言えば、この見立てを実証することができた（実状に即して論証することができた）という点が「研究成果」である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 呉, 震	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 陽明後学の研究 回顧と展望	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早坂 俊廣	4. 巻 10(1)
2. 論文標題 邵廷采と全祖望(下)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早坂俊廣	4. 巻 9(2)
2. 論文標題 邵廷采と全祖望(上)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 早坂俊廣
2. 発表標題 周汝登的新安行
3. 学会等名 2023陽明心学大会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 早坂俊廣
2. 発表標題 “止”の倫理学
3. 学会等名 “陽明文化の当代価値”學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 早坂俊廣
2. 発表標題 羞恥の倫理学
3. 学会等名 “儒学与廉潔文化建設”國際學術研討会暨江蘇省儒学学会年会2022（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 早坂俊廣
2. 発表標題 論王畿的“天根月窟說”
3. 学会等名 2021陽明心學大会（國際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吳震・申緒ろ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上海古籍出版社	5. 総ページ数 412
3. 書名 中国哲學的豐富性再現 荒木 見悟与近世中国思想論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------